

37	香川大学教育学部附属高松小学校	R4～R7
----	-----------------	-------

令和7年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

個の生活知を豊かにする新領域「経験」と、体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発

2 研究の概要

新領域「経験」は、2つの小領域で構成し、異学年集団で活動を行う。第1小領域は、多様な「ひと・もの・こと」と出合う経験を通して、学問につながる個の生活知を豊かにする「はっけん」の時間である。この時間で獲得した生活知と教科学習における学問知を組み換えながら学習するプロセスを通して、知の創造を目指す。第2小領域は、実社会とつながるプロジェクト活動を通して、様々な成功や失敗を味わう経験により、生き方・在り方につながる個の生活知を豊かにする「ちょうせん」の時間である。

「じぶん」の時間は、経験領域での質の高い体験をもとに、同学年集団で議論を深め、子どもたち自ら変容し、成長するプロセスを通して、価値の創造を目指す。経験と知、経験と価値を構造化した教育課程を実現することにより、「自律的に学ぶ力」「関わる力」「創造する力」を育成し、人格の完成を目指すことができる。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

- ① 個の生活知を豊かにする「経験領域」の活動を異学年集団で行い、個の生活知をもとに学問知へと導く「教科学習」を同学年集団で行う教育課程を通して、知の創造が実現する。
- ② 主に「経験領域」で活動したことを、同学年集団での議論を通して、より深い価値創造につないでいく「じぶん」の時間を設けることで、体験と分断されない実感を伴った価値の創造が実現する。

（2）教育課程の特例

本校では、教科学習において知を創造するためには、「経験」と「学問」を組み換えながら学習するプロセスが必要だと考えている。子どもたちは、概念や知識を累積的に学ぶのではなく、学問知と生活知の関係を調節し、組み換えつつ学ぶ存在であると捉えており、このようなサイクルが重要であることは、これまでの教育学研究の文脈からも導くことができる（例えば田中耕治、2017）。

また、個の生活知が豊富にあることで、子ども一人一人の考えが教科学習の中で生かされる。そのためには、子どもたちの経験、つまり個の生活知が豊富であることが重要な役割を果たすと考え。現代の子どもたちは、デジタルネイティブであり、インターネットやデジタル機器に関連した多くの生活知をもっており、パソコン等で知らない知識をすぐに獲得することができる。しかし、知識は単独で存在するものではなく、様々な知識や経験と結びつくことで、より質の高い知識に変換されることを考

えると、このままでは獲得した多くの知識が組み換わることは期待できない。

さらに、直接体験が豊かであった時代とは異なり、現代は日常生活の中で直接体験により自然と学んできた生活知や体験とデジタル機器を通しての生活知や経験の軽重が大幅に変化しているといわれている。このような状況を踏まえると、子どもたちは、学問につながるための個の生活知が十分に蓄積されていないのではないかと考える。

教科学習において「経験」と「学問」を組み換えながら学習するプロセスを実現することで、これまで困難であった経験領域と教科学習を具体的につなぐことが可能になる。それにより、学習内容を精選したり、領域同士を組み合わせで考えたりすることも可能になり、時数削減のための一助になり得る。さらには、各教科の目標及び内容そのものの変革に迫るものにもなると考えている。

本研究では、これらの個の生活知を、異学年集団で行う経験領域「はっけん」と「ちょうせん」の2つの活動によって補い、個の生活知を豊かにすることを目指す。そして、この領域での質の高い経験を、同学年集団での教科学習と「じぶん」の時間に生かしていく。

「はっけん」の時間は、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」との出会いを通して、学問につながる個の生活知を豊かにすることを目指す。教師は教科学習につながる生活知を想定し、異学年集団における学びの良さを生かした授業づくりを行う。つまり、「はっけん」を行うことにより、同学年での教科学習において、生活知と学問知の組み換えが起こりやすくなり、子ども一人一人がもつ生活知が学習の中で生かされる状況をつくることができる。また今年度、本校では「はっけん」の授業実践を行っており、異学年集団での学習の中で様々な生活知を表出する姿や、「はっけん」の時間で獲得した生活知と教科学習での知識をつないで、知を再構成していく子どもの姿を見ることができており、その有効性を感じている。

「ちょうせん」は異学年集団での実社会とつながるプロジェクト活動において、様々な成功や失敗を味わう経験により、生き方・在り方につながる個の生活知を豊かにすることを目指す。実社会に働きかけていくプロジェクト活動において、子どもたちは、様々な成功経験や失敗経験を味わう。そのような状況の中で、子どもたちは、仲間を価値のある存在として捉え、議論を積み重ねながらプロジェクトのゴールを目指していく。仲間と共にプロジェクト活動を行う過程で身に付いた個の生活知は質の高いものになり、そこで得られた個の生活知を、主に「じぶん」の時間での価値の創造につないでいく。

これまで述べた経験領域は、異学年集団で行う。本校は、これまで縦割り創造活動や普段の学校生活（給食・掃除等）において、異学年集団での活動を伝統的に行ってきたおり、活動の土台ができています。さらに、各学年ならではの感性や視点が学びの深まりにつながっていること、異学年学級は、一人一人のよさを認め合う個性化された空間になっていること、学年を超えた教え合いや学び合いが充実していること等、異学年集団における学びの有効性を、教師も子どもも実感している。その意味でも、本研究は、これまでの一斉一律の授業スタイルを抜け出す、新たな学びのかたちになり得ると考える。

経験領域での質の高い体験をもとに、同学年集団の「じぶん」の時間で話し合い、子どもたち自ら変容し、成長するプロセスを通して、価値の創造を目指す。この時間を通して、子どもは自分の生活そのものを見つめ、自分にとって「何が大切か」を捉え直し、個や集団にとって大切な価値の創造へつなぐ。西野真由美（2017）は、『体験と分断されない学びは、子どもにとって切実な状況が生まれ、いろいろな生活場面におい

て、個別的な「今、ここでいかに行うべきか」を判断することができる』と述べている。以上から、「じぶん」の時間は、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得る。

「経験領域」及び「じぶん」の時間の新設にあたり、以下のように教育課程の変更を行う。

① 経験領域

ア) 「はっけん」の時間は、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」との出会いや様々な経験を通して、学問につながる個の生活知を豊かにすることを目指す。

全学年において、各教科の一定時間を統合して、54 時間を配当する。各教科の一定時間とは、教科学習を行うに当たり、当該教科の学問知につながる生活知を想定した上での必要時間を示す。主に、単元の導入や生活の場面で活用できる時間、単元終末での学習内容との関係付けや生活との意味付けの時間として充てる。

イ) 「ちょうせん」は実社会とつながるプロジェクト活動を通して、様々な失敗や成功を味わう経験により、生き方・在り方につながる個の生活知を豊かにすることを目指す。

3～6年生において、特別活動と総合的な学習の時間を統合して、105 時間を配当する。異学年集団での実社会とつながるプロジェクト活動は、特別活動が示す「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」、総合的な学習の時間が示す「探究的な学習のよさ」を実現できると共に、子ども主体の切実性のある活動において、実社会における質の高い経験を味わうことができると考える。1・2年生は、実社会での課題が教科等横断的な知識を身に付ける上で有効であるという考えを踏まえ、教科と特別活動を統合して 105 時間を配当する。

② 近年のグローバル化を踏まえ、1・2年生において、外国語活動を 17 時間配当する。

③ 主に経験領域で活動したことをもとに、同学年集団で価値創造を行う時間として、「特別の教科 道徳」を「じぶん」の時間として、新たに創設した。本研究の、体験と分断されない価値創造のかたちが、「特別の教科 道徳」への今後の新たな視点になると考える。各学年週 1 時間の 1 年生は 34 時間、2～6年生は 35 時間配当した。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

《経験領域》

【「はっけん」の時間】

目標を以下のように設定した。

子どもたちが、遊びの要素を取り入れた活動に浸り、異学年集団で感覚・感性を共に味わい、見方・考え方を働かせながら、自分なりの論理をつくる。

「遊びの要素を取り入れた活動」とは、子どもの知的好奇心を満たす面白さや楽しみがある活動である。ホイジンガ(2018)が「人間社会に固有で偉大な活動には、すべてははじめから遊びが織り込まれている。」と述べるように、遊びと人が創りあげてきた学問や文化にはつながりがある。「はっけん」の時間では、遊びの要素を取り入れた活動を通して、自分なりの論理をつくることを目指している。具体的には、以下のような要素を想定した。

競争 模倣 収集 感覚 偶然 創造 報酬 物語 など

「異学年集団で感覚・感性を共に味わい」とは、実際に体験して感じた自他の思い

を十分に知ることである。異学年集団だからこそ、同じ活動においても多様な感覚・感性が表出され、それらを共に味わう中で、自然に子どもたち一人一人の自分なりの論理がつくられていくことが期待できる。

このような目標を達成するために、まず、「はっけん」の時間でつくられる自分なりの論理と教科学習や生活場面とを関連付けて考える子どもたちの姿を想定した。次に、その姿に至るための本活動の目標や感覚・感性、見方・考え方がどのように働くかについて考えていく。そして、これらを実現する活動となるように、遊びの要素や活動展開、環境設定（人 物 空間 時間 導線）の3つの視点からしかけを緻密に想定した。

評価については、子どもがつくる自分なりの論理を見取る。1ターンの活動によって、子どもたちがどのような自分なりの論理をつくることができたかをワークシートや表現物、発言などから見取る。特に、各活動に応じたワークシートを活用し、自分なりの論理を表出し、ファイリングしていく活動を全活動で行っていく。活動によっては、1時間単位で、自分なりの論理がつくられたり、その自分なりの論理が活動の過程で再構成されたりしていく。その変容を捉え、なぜ自分なりの論理が変わっていったのか、どうしてそのように考えたのか等を個別に問いかけることで、自分なりの論理の背景にある個々の経験や学びを捉えていく。活動の中で、自分なりの論理をもつことができている子どもたちには、教師が声をかけたり、友達との交流をしかけたりするなど、即時的に支援を行うことで、自分なりの論理をつくることができるようにした。

【「ちょうせん」の時間】

目標を以下のように設定した。

異学年集団で学校行事や社会とつながったプロジェクト活動に自律的に取り組み、様々な達成感やうまくいかないもどかしさを共に味わいながら問題解決することで、よりよい生き方・在り方につながる思いや願い、感じ方をもつ

「ちょうせん」の時間における「自律的に取り組み」とは、大きく2つの姿を想定している。1つ目は、プロジェクトのゴールに向かって見通しをもって活動を進めたり、進める中で自分たちの問題解決の過程についてふり返ったりする姿である。2つ目は、「じぶん」の時間で見出した価値を実践につなぎながら、プロジェクトを進める一員としての責任や自覚をもって、プロジェクト活動に自分から取り組むといった主体性のある姿である。

「様々な達成感やうまくいかないもどかしさを共に味わう」とは、異学年集団の中で互いの個性を生かし合いながら、成功と一緒に喜んだり、直面した課題についてみんなで解決しようとしたりする姿である。教師は、約1年間のプロジェクト活動で個々の思いや願い、感じ方を大切に、異学年集団の中で協同的に問題解決をくり返していく状況づくりを行う。多様な価値観をもつ異学年集団における学びは、一見すると非効率的であり、事実、毎日がイレギュラーの連続である。だからこそ、子どもたちが「うまくいかないもどかしさ」という壁に直面しながら試行錯誤していく過程を教師が大切にすることで、達成感を味わいながら、生き方・在り方につながる個の経験を豊かにすることができる。

「生き方・在り方につながる思いや願い、感じ方」とは、これからの社会を、多様な他者と共によりよく生きていくことにつながる思いや願い、感じ方のことを指す。教師は「ちょうせん」の時間の目標を踏まえて、子どもたちにとってほしい思いや願い、感じ方について想定しておく。「ちょうせん」の時間では、社会（学校外の「ひと・もの・こと」）とのつながりをもったプロジェクト活動の中で、問題解決が展開されてい

く。社会とつながったプロジェクト活動を行うことで、子どもたちは切実な問題解決を繰り返していく。その過程で、仲間を価値のある存在として捉えたり、活動の意義を感じたりすることで、よりよい生き方・在り方につながる思いや願い、感じ方をもつことができる。

価値創造と実践化の往還を見据えて、次のようなエピソードの要素を含んだ思いや願い、感じ方をもつことを目指した。

・ 成功・失敗・葛藤・感動・発見・成長・挫折・後悔・諦め・戸惑い 等

評価については、1年間を通して、子どもの姿、ふり返し、ウェビングマップなど様々な方法で思いや願い、感じ方を見取り、記録した。そうすることで、一人一人に場面やエピソードが保障できているかどうかを検証し、授業改善や支援に生かすことができるようにした。

【教科学習】

目標を以下のように設定した。

個の経験と学問をすることを関係付けながら問題を解決する学習を通して、自律的な態度、共感的・協同的な態度を養うとともに、見方・考え方を育み、学習内容の実感を伴った理解を目指す

教科学習では、「実感を伴って学習内容を理解することで、身の回りの世界の見え方が変わり、生活を豊かにする学習」を目指し、具体的な授業づくりについて研究を進めてきた。実感を伴って学習内容を理解するためには、個の経験と学問することをつなぎながら学んでいく過程が大切である。その前提に立ち、経験とつなぎながら問題解決していく子どもの姿を、感受、見通し、吟味、意味付けの姿として置き、その中身について単元の学びの過程(右表)と関連させながら検討した。また、その姿を実現するために、どのようなしかけ・支援が有効であるかについて、実践を通して整理を行ってきた。

評価については、子どもが主体となった評価を学びの過程で取り入れる視点について検討した。視点は右図の通りである。

その結果、教科学習における子どもたちからの発言の中に、経験を具体例や根拠として示す機会が激増した。また、教師の発問の中に、根拠や背景を問う機会が増加し、既習事項や生活経験、「はっけん」の時間でつくった自分なりの論理を軸とした教科学習の捉え方が変化した。つまり、子ども一人一人の変容を大切にした教科学習の捉え方に研究の軸が転換した。

【「じぶん」の時間】

目標を以下のように設定した。

多様な経験をもとに自己を見つめ、同学年集団で自己の思いを表出し、他者の多様な思いに触れる中で、見方・考え方を育み、個や集団にとってよりよい価値を見出そうとする

I 単元の課題と計画づくり	生活文脈に沿った流れの中で事象と出会い、解決したい問いや、解決への見通しが含まれた単元・題材の課題を共有する。課題に対する自分なりの論理をもとに、学習計画を立てる。
II アクティブな習得(による自分なりの論理の再構成)	単元の課題を解決する過程で、知をアクティブに習得したり、個や集団での吟味をくり返し行ったりして、新たな知や経験とつながら、自分なりの論理を再構成していく。
III 学習内容の理解文脈にもどす	問いに対する解(学習内容)を集団の吟味を経て見出す。そして、学んだことと生活とのつながりを考えるとともに、問題解決過程を自分なりに価値付ける。

- ①単元のゴールと今の自分の理解度との差や、取り組み方が適切かどうかを考えること
- ②問いに対する現在の思いを表出すること
- ③ポートフォリオを用いて自らの学びの過程を振り返ること
- ④自己の変容の要因や背景を自覚化すること
- ⑤次時の学習への見通しをもち、活動への意欲を高めること

この目標を実現するためには、見方・考え方を育む必要がある。見方・考え方は以下
 自他の体験に伴う思いや願い、感じ方に着目し、それらを比較・関係付け、統合したり、
 視点や立場を変えたりしながら捉えている

のように設定した。

授業では、「じぶん」の時間の見方・考え方を育むことをねらい、子ども自身が創造した価値は直接的にその良し悪しを評価せず、見方・考え方が育まれているかを評価の対象とした。それは、創造された価値が重要なのではなく、自ら価値を創造していくプロセスを重視したからである。ただし、創造する価値は、その子ども個人や集団にとって重要だ、大切だと感じる価値であり、どのような価値でも認めていくことを前提とする。しかし、独りよがりや自分勝手な価値ではなく、分かち合えたり、認め合えたりできる価値を求めている。

見方・考え方にある「自他の体験に伴う思いや感じ方」とは、達成感や課題につながる出来事に伴って、子ども一人一人に生じる、「うまくいった、嬉しかった、気持ちよかった」や、「うまくいかなかった、悲しかった、不快に感じた」といった思いや願い、感じ方のことである。子どもが価値を見出していく過程で、これらに着目することが重要であると考えている。なぜなら、これまでの本校の実践からも、子どもが価値を見出していく際に、自分や友達の体験に伴う思いや願い、感じ方に着目する姿が多く見られたからである。

「比較・関係付け」とは、実践をくり返す中で蓄積された自他の思いの共通点や差違点を比較したり（「〇〇と違って、△△だから、…」など）、具体的場面は異なるが、同じような状況などに関係付けたり（「あのときの〇〇と同じだったから、△△になったんだね、…」など）することである。また、「統合する」とは、価値を見出すことやその先の実践化に向けて、多様な考えを自分なりに整理し、まとめることである。

そして、「視点や立場を変える」とは、ある物事に対して、異なる人物の立場から捉えたり、違う考え方で捉え直してみたりするなどの、多面的・多角的に考えることである。

「よりよい価値」とは、「自己や他者、集団にとって深い意味を感じることできる、または人生を豊かにすることにつながる物事のよりよい捉え方」である。子どもは6か年を通して、価値創造と実践をくり返ししながら、よりよい生き方・在り方とは何かを問い続けていくことで、自ら価値を創造できるようになる。

評価としては、先述のとおり、創造された価値は評価せずに、見方・考え方が育まれているかを見取り、支援に生かした。

（２）研究の経過

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・新領域「経験」の小領域である①「はっけん」②「ちょうせん」、また「じぶん」の時間で目指す子どもの姿を検討し、設定する。 ・各領域で授業実践を行い、具体的な内容や評価について検討する。 ・新領域のカリキュラムを試行し、カリキュラム評価を行う。
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・新領域「経験」の小領域である①「はっけん」②「ちょうせん」、また「じぶん」の時間の指導方法と評価の在り方について、実践を通して吟味する。 ・新領域との関連による、各教科の年間指導計画等の見直しを図る。
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ・新領域についての本校独自の年間計画モデルを作成する。 ・これまでの研究実践を通して、指導方法や評価方法を改善する。

第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ・第3年次に作成した本校独自の年間計画モデルを実施し、本カリキュラムの総括を行い、経験から新たな知や価値をつくる教育課程を実現するための指導方法と評価の在り方をまとめ、公立学校にも発信する。
------	---

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身の変容が見える作品や文章など、学びの成果を表出している姿を評価する姿から子どもの変容を見取る。 ・子ども一人一人のエピソード記録を行う。その際には、各領域で設定した目指す姿に迫るプロセスに着目して、記録を行っていく。 ・知や価値を創造する姿を見据えた評価項目、資質・能力につながる項目について、前期に本校教員と大学教員（香川大学）が連携して評価項目をつくる。また、後期（2月）は、その評価項目を基にした質問紙調査を、子ども・保護者・教師を対象に行う。 ・学校評議員や運営指導委員、外部講師からの指導、助言、評価を受ける。さらに、初等教育研究発表会（2月開催）において、参会者から意見をもらい、カリキュラム評価を行う。
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身の変容が見える作品や文章など、学びの成果を表出している姿を評価する姿から子どもの変容を見取る。 ・子ども一人一人のエピソード記録を行う。その際には、昨年度明らかになったことを踏まえて、見取りの視点を明確にした上で行う。 ・教師だけでなく、子ども自身が行う適切な評価の在り方についても考える。 ・異学年集団における評価の在り方を、実践を通して考える。 ・子ども、保護者、教師を対象に質問紙調査を年に2回（10月、2月）行い、昨年度からの変容について整理し、カリキュラムの有効性についての吟味を行う。 ・学校評議員や運営指導委員、外部講師からの指導、助言、評価を受ける。初等教育研究発表会において、参会者から意見をもらい、カリキュラム評価を行う。
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ・第2年次で見出した、本カリキュラムにおける評価方法をもとに、多面的・多角的な視点で評価を行う。 ・本カリキュラムを実践したことで、教師自身の教育観がどのように変化したかを評価する。 ・子ども一人一人のエピソード記録を行う。さらに、香川大学教育学部附属高松中学校と連携して、本カリキュラムで育った子どもたちの中学校での様子について追跡調査を行い、カリキュラムの有効性を探る。 ・子ども、保護者、教師を対象に年に2回（10月、2月）の質問紙調査を行い、3年間の変容について整理し、カリキュラムの有効性についての吟味を行う。 ・学校評議員や運営指導委員、外部講師からの指導、助言、評価を受ける。初等教育研究発表会において、参会者から意見をもらいカリキュラム評価を行う。
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度を含むこれまでの評価を踏まえて、4年間の研究成果の総括を行う。 ・本校独自の年間計画モデルについて、実践を通して評価を行い、付加・修正を行っていく。 ・子どもの見取りに関して、教員間で共有するために、活動時の様子を共有するためにファイルの作成を行う。エピソードの共有を含め、教員間での情報共有の方法を見出していく。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 子どもの効果

研究開発に関わり、知や価値を創造する姿を見据えた評価項目、資質・能力につながる項目について、第1年次に本校教員と大学教員（香川大学）が連携して評価項目を作成した。その評価項目を基にした質問紙調査を、子ども（10月と2月）・保護者（2月）・教師（2月）を対象に行うことで、本カリキュラムの有効性を客観的に分析した。結果は後述の表・グラフの通りである。

エピソード記録や表現物を分析すると、教科学習において、子ども自身の経験（自分なりの論理）を単元で獲得した知識と関係付ける言葉が出たり、子ども自身の素朴概念が変容することで、理解が深まったりする子どもの姿を見ることができた。

また、子どもの発言の中に、これまでの経験を根拠として抽象的な概念を形成したり、その概念を具体的な事例を挙げて説明したりする子どもの姿が年々増えてきている。さらに、友達の説明に対して、「はっけん」の時間の活動があるからこそ、共通した事実を具体例として挙げたり、解釈するための手立てとすることができ、「ああ、なるほど」「そういうことか」と納得感を得るような反応がどの学年でも起こっている。

下記の子どものアンケート結果（表5）から、多くの設問で80%を超える高い肯定率が示された。

	肯定率 全体(R7)	前年度差	肯定率 全体(R6)	肯定率 全体(R5)	肯定率 全体(R4)
(1)学校に行くのが楽しいです	91.7%	2.9%	88.8%	91.9%	88.5%
(2)ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがあります	92.2%	3.7%	88.5%	93.1%	91.3%
(3)自分には、よいところがあると思います	85.9%	3.5%	82.4%	86.3%	78.6%
(4)普段の学級で、わたしが活躍できるところがあります	82.6%	6.0%	76.6%	84.0%	76.2%
(5)縦割り学級で、わたしが活躍できるところがあります	78.5%	2.1%	76.4%	83.5%	73.5%
(6)「ちょうせん」の時間を楽しくすごしています	81.8%	1.2%	80.6%	88.5%	82.1%
(7)「ちょうせん」の時間に、思ったことを安心していえます	68.9%	2.7%	66.2%	79.7%	69.6%
(8)「ちょうせん」の時間に、「自分にもできることがあるな」と感じることがあります	81.0%	1.6%	79.4%	87.5%	79.8%
(9)「ちょうせん」の時間に学んだことは、学校生活のなかでも役立つなと感じます	82.3%	2.9%	79.4%	84.9%	79.3%
(10)「はっけん」の時間を楽しくすごしています	94.3%	2.2%	92.1%	94.5%	89.9%
(11)「はっけん」の時間に、思ったことを安心していえます	76.1%	2.3%	73.8%	82.5%	74.5%
(12)「はっけん」の時間に、いろいろな「はっけん」や「おどろき」があります	88.3%	1.0%	87.3%	91.9%	87.4%
(13)「はっけん」の時間に学んだことは、他の授業にもつながるなと感じます	87.3%	4.8%	82.5%	91.8%	84.6%
(14)「じぶん」の時間を楽しくすごしています	79.3%	0.8%	78.6%	80.8%	75.7%
(15)「じぶん」の時間に、思ったことを安心していえます	77.1%	2.9%	74.1%	79.6%	70.6%
(16)「じぶん」の時間に、「大事なことがわかった」と感じることがあります	88.6%	6.2%	82.4%	86.8%	82.4%
(17)「じぶん」の時間に学んだことは、学校生活のなかでも役立つなと感じます	88.6%	6.4%	82.2%	87.8%	78.8%
(18)授業で教わったことや調べたことについて、自分なりに考えている	87.6%	2.6%	85.0%	85.7%	84.3%
(19)学校での学びに、興味をもって自分からとりくんでいる	85.7%	4.8%	80.9%	82.6%	75.7%
(20)授業で難しいと思うことがあっても、やり方や考え方を工夫して何とかしようとしている	90.1%	5.4%	84.7%	87.5%	86.3%
(21)自分と違う意見をもっている友だちとも、協力していっしょに学んでいる	89.9%	1.1%	88.8%	91.4%	89.9%
(22)友だちと協力するときに、自分の思ったことをきちんと伝えている	88.3%	1.3%	87.0%	88.3%	88.4%
(23)友だちといっしょに学ぶときに、友だちがどうしたいと思っているかを考えている	87.5%	2.3%	85.2%	89.0%	87.0%
(24)同じ学年の友だちや違う学年の友だちと、いっしょに何かを作りあげたり、新しい発見をしたりしている	87.2%	2.5%	84.7%	88.3%	87.0%
(25)「どうしてかな？」と思うことがあったら、これまでに学んだことを使って考えている	85.7%	5.0%	80.7%	84.7%	82.4%
(26)今までの授業で習ったことや学校の外で知ったことを使って、授業に取り組んでいる。	87.6%	5.9%	81.7%	87.8%	86.2%
(27)自分の考えと友だちの考えをつなぎながら、授業に取り組んでいる。	89.9%	3.9%	86.0%	86.9%	84.4%
(28)学校外の人と話したり、いっしょに活動したりするのは楽しい	88.8%	-0.8%	89.6%	89.6%	82.9%
(29)地域や社会のできごとに関心がある	83.6%	0.2%	83.4%	88.2%	80.8%
(30)どうすれば地域や社会をよりよくできるかについて、考えている	74.1%	-1.6%	75.7%	78.1%	70.6%
(31)わたしは、学校外の人とうまく協力することができると思う	77.8%	-2.2%	79.9%	80.7%	72.7%
(32)わたしは、地域の人の役に立つことができると思う	73.8%	-3.1%	76.9%	72.5%	65.2%
(33)わたしががんばることで、地域や社会をよりよくしていくことができると思う	72.1%	-3.3%	75.4%	75.1%	66.8%
(34)学校外の人と話すなかで、自分にとって大切だと思うことがあった	85.8%	2.2%	83.6%	88.2%	80.0%
(35)学校外の人と話すなかで、自分の考えが広がった	84.1%	1.5%	82.6%	83.2%	79.5%
(36)学校外の人と出会って、自分の将来のことを考えた	73.8%	-3.1%	76.9%	75.4%	69.4%

しかし、昨年度との比較では、地域との関連が薄くなることにより、肯定率の低下がみられた。子どもが積極的に地域へ飛び出していけるような活動展開を保障する必要

が示された。「ちょうせん」の時間において、教師の介入の度合いにより、子どもが自らが学級を運営する機会が少ない場合、肯定率が低下することが、経年変化より読み解くことができた。子どもにとって自由度の高い「はっけん」の時間より比較的制限の多い「ちょうせん」の時間での肯定率の低下があったと推測している。つまり、プロジェクト推進に自由度があり、子ども自身の決断による「ちょうせん」の時間を求めていると結論付ける。

② 教師への効果

本年度の取り組みにより、子どもの生活背景（経験）を引き出すような授業づくりができるようになった。教育者の東井義雄は、「子どもには、子どもなりの生活論理がある。私が、いくら心して子どもの生活の論理を予想し、予想してかかっても、子どもは巧みに私の手から抜け出して、私の授業をつまづかせ続けた。子どもはつまづきの天才である」と述べている。本校の教師は、この東井義雄の考えを大切にし、子どもがもともと持っている論理を想定し、子どもなりの背景があることを理解した上で授業づくりができるようになった。

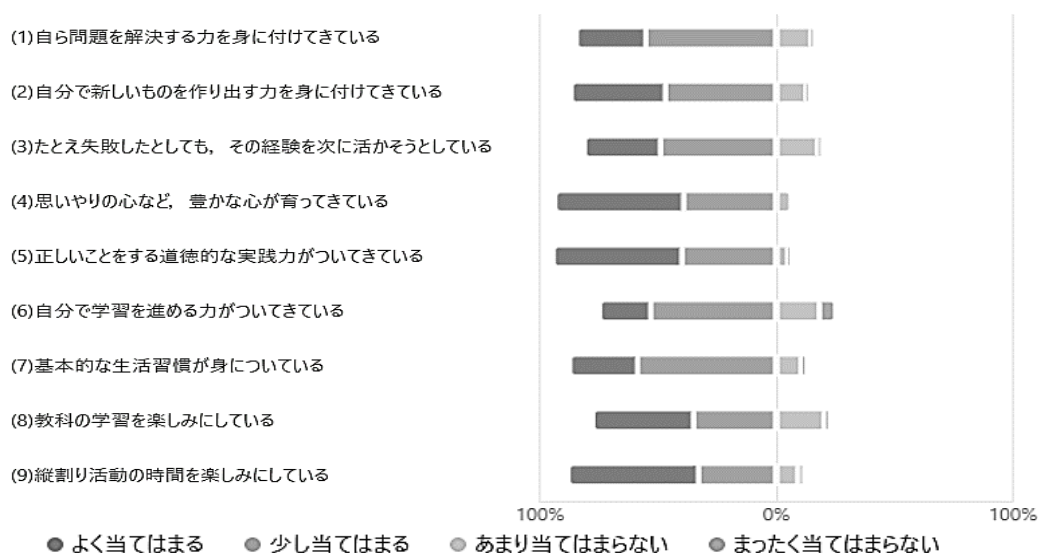
本校3年目の若手教員は、「教師から話をする時、頭ごなしにダメと指導するのではなく、なぜいけないのか、教師の思い、学校の思い、保護者の思い、友達の思いなど、自分以外の人の思いや願いを踏まえて指導することを意識するようになった。また、授業中に、学習内容だけでなく、学び方の価値付けを行うようになったと思う。子どもたちからも、授業の受け方、授業をみんなでつくることを意識する必要性を実感している声も聞こえてきた」と述べている。また、9年目の中堅教員は、「子どもの背景を考えて、叱ったり褒めたり、言葉かけをするようになった。例えば、結果として表現された行為を叱るのだが、もしかしたら今まで経験がなかったのかもしれないので例え話を踏まえて伝えようとか、今見逃した場合、この子はごまかして逃げる経験を学ばせてしまうのか等、考えるようになった」と述べるなど、教育観を変容した姿が見られるようになった。

さらに、本カリキュラムを行うことで、学級担任と縦割り担任の連携が密になったことも挙げられる。放課後に定期的な縦割りの会を行い、縦割り学級の様子や、子どもがプロジェクト活動の中で味わっている経験を共有すると共に、若手教員が悩みを相談したり、アドバイスをし合ったりするなど、本校の教員にとって貴重な場となっている。

③ 保護者等への効果

次頁グラフ1は、令和6年度2月の保護者による回答結果である。

研究開発を行うにあたり、新カリキュラムについて、PTA総会で保護者向けに説明する機会を設けたり、定期的に「縦割り活動だより」「『じぶん』の時間だより」を発行したり、参観日に公開活動を設定したりすることで本カリキュラムの内容や方法について理解が得られるようにした。R6年度末の保護者用アンケート（グラフ1）では、「(4)豊かな心が育ってきている」「(5)正しいことをする道徳的な実践力がついてきている」の設問で90%を超える結果が表れている。このことから、本カリキュラムが知や価値の創造と生活の中での実践を実現するために有効なカリキュラムであると考えている。



グラフ 1 保護者アンケート結果 (N=143)

（２）実施上の問題点と今後の課題 カリキュラム全体を通して

本校は、子どもの「自分なりの論理」「思いや願い、感じ方」の変容を主軸において研究を進めてきた。子どもの内面の表出を意図し、その機会を保障しない限り、教師が子どもの「自分なりの論理」「思いや願い、感じ方」を把握することはできない。また、その変容は、単なるふり返りでは表出ができない難しさがある。そう考えると教師が、子どもの内面を捉えにくい一面があることは否定できない。今後は、子どもの内面を引き出したり、知や価値の創造に生かしたりできるような表出の場とプロセスの在り方を検討していく。

そして、子どもたちが本校を卒業後も継続して、知や価値を創造できるかについて、追跡調査を行うようにする。卒業生のインタビューでは、下記のような学びがあったと説明があった。

- ・「ちょうせん」の時間では、異学年集団で活動したため、多様な価値観をもった他者の意見を取り入れる土壌ができた。まず、相手の意見を受け入れた上で、自分の考えや意見とを組み合わせることにより、よりよい案が生み出せることにつながっている。
- ・自分の説明が抽象的な場合は、相手の表情を見て、具体例を出しながら説明することで、分かってもらえることが、異学年集団で活動したことで身に付いたと感じる。

上記のような結果から、縦割り活動での学びが多様な価値観をもつ他者と分かち合う素地が養えていると推察している。

さらに、本年度は、経験領域の時間を 40 分で実施してみた。たった 5 分の短縮であるが、ふり返りの時間の確保が困難になったり、活動時間の確保ができなかったりしたため、常時 45 分間の実施のために縦割り清掃と組み合わせることにより、活動時間を延ばせるような柔軟な活動時間の確保が必要と考える。

香川大学教育学部附属高松小学校 教育課程表（令和 7 年度）

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	ちようせん	はっけん	じぶん	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語								
第 1 学年	268 (-38)		108 (-28)		78 (-24)	51 (-17)	51 (-17)		84 (-18)		0 (-34)	17 (+17)		0 (-34)	105 (+105)	54 (+54)	34 (+34)	850
第 2 学年	278 (-37)		148 (-27)		81 (-24)	53 (-17)	53 (-17)		86 (-19)		0 (-35)	17 (+17)		0 (-35)	105 (+105)	54 (+54)	35 (+35)	910
第 3 学年	236 (-9)	63 (-7)	166 (-9)	82 (-8)		54 (-6)	54 (-6)		99 (-6)		0 (-35)	32 (-3)	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	54 (+54)	35 (+35)	980
第 4 学年	236 (-9)	82 (-8)	166 (-9)	98 (-7)		54 (-6)	54 (-6)		99 (-6)		0 (-35)	32 (-3)	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	54 (+54)	35 (+35)	1015
第 5 学年	166 (-9)	94 (-6)	166 (-9)	99 (-6)		44 (-6)	44 (-6)	57 (-3)	84 (-6)	67 (-3)	0 (-35)		0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	54 (+54)	35 (+35)	1015
第 6 学年	166 (-9)	99 (-6)	166 (-9)	99 (-6)		44 (-6)	44 (-6)	52 (-3)	84 (-6)	67 (-3)	0 (-35)		0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	54 (+54)	35 (+35)	1015
計	1350 (-111)	338 (-27)	920 (-91)	378 (-27)	159 (-48)	300 (-58)	300 (-58)	109 (-6)	536 (-61)	134 (-6)	0 (-200)	98 (+28)	0 (-200)	0 (-200)	630 (+630)	324 (+324)	209 (+209)	5785

※ 授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名 香川大学教育学部附属高松小学校

校長名 藤元 恭子

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 〒760-0017 香川県高松市番町五丁目1番55号

電話番号 087-861-7108 FAX 087-861-1106

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
105	4	104	3	101	3	102	3	100	3	103	3	615	19

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	1	21	0	1	0	0	3
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	2	4	0	36						

5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成 4～6年度 子供の認知過程についての研究 (文部省：研究開発学校指定)

平成 14～16年度 才能伸長についての研究 (文部科学省：研究開発学校指定)

平成 25～28年度 2領域カリキュラムに関する研究 (文部科学省：研究開発学校指定)

平成 29～令和3年度 2領域カリキュラムに関する研究 (文部科学省：教育課程特例校指定)

令和 3～4年度 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究 (文部科学省：実践研究校指定)